

港と観光シンポジウム 「宮古島へのクルーズ船 誘致と地域振興」

仕事の窓

開発建設部
BUSINESS REPORT 4

日本を含むアジアは
新しい市場として有望。



平 成十七年十一月三十日に大型クルーズ船『飛鳥』が宮古島に初めて寄港しましたが、三月から『飛鳥』の後継船として就航する『飛鳥II』になると現在の平良港の岸壁には接岸できなくなります。そこで、今回の『飛鳥』寄港に併せ、平良港の今後の観光支援のあり方を考える「港と観光シンポジウム」を市内のホテルで開催したところです。



クルーズ船『飛鳥』入港と歓迎セレモニー(平良港)

シンポジウムは、まず、宮古島市の伊志嶺亮市長の「魅力ある宮古島づくりを進め、観光振興による地域経済の活性化を図っていきたい」との挨拶で始まりました。

●基調講演1 クルーズの魅力

小田武(飛鳥船長)

『お客様がクルーズに求めるものは、船そのものの魅力(豪華な設備、食事、数々のエンターティナー)と寄港地の魅力であり、近年は裕福層だけでなく普通のお客さんも増えている。また、「安全で確実に入港できる設備をもった港」、「美しい港」、「背景に古い歴史や観光の魅力があり、シヨッピンクが楽しめる」、「旅客船ターミナルがある」、これらの要素が調和の取れた港は世界のトップクラスの港になれる。』など、クルーズの魅力について講演して頂きました。

●パネルディスカッション:クルーズの魅力と地域振興

- コーディネーター:岩佐吉郎(名桜大学大学院客員教授)
■パネリスト:小田船長、上田さん、藤村明憲(宮古観光協会会長)、兼城克夫(沖縄県宮古支庁長)、佐藤浩孝(沖縄総合事務局開発建設部長)

- 小田船長 ▶ 平良港は想像していた程狭くない。港内の水のきれいさは世界のトップクラス。歩いて街に行けるのは強み。
- 上田さん ▶ 寄港地の方々との出会い・交流は他の旅のスタイルでは味わえないもの。団塊の世代に着目「第二の人生行路の出航を船旅で」
- 藤村会長 ▶ 大型クルーズ船対応の港湾整備が必要。地域が暖かく迎えて交流を深めることが大切。
- 兼城支庁長 ▶ 台湾からの観光客という見方が重要であり、外国語対応の案内標識や周辺ビーチの整備、循環バスは必要。
- 佐藤部長 ▶ 我々は、安全で、地域の活性化の役割をもち、環境と調和のとれた港を造っている。今ある港を再認識して、より良く使って頂きたい。平良港のクルーズ船の年間寄港回数は全国十位。今後はクルーズ船がもっと使いやすい港に整備していきたい。
- 岩佐教授 ▶ 人を迎え入れる正面玄関としての港の整備が必要であるとともに、地域に開かれた港づくりが必要。

最後に、会場からは「クルーズ費用」、「オプションツアーの設定方法」等の質問もあり関心の高さが伺えました。



パネルディスカッションの様子

●基調講演2 現代クルーズ事情

上田寿美子(クルーズライター)

『海外では大型新造船ラッシュ。今年六月には、船上でサーフィンやアイススケートが楽しめる等、幅広い年齢層に対応できる活動的な施設を備えた十五・八万総トン超の大型船も就航予定。最近では年配層を中心とした親子三代が流行。大自然を残したプライベートビーチも人気が高い。アラ

スカやカリブ海は飽和状態であり日本を含むアジアは新しい市場として有望。また、宮古はカリブ海に匹敵する美しい海があり、美しい島巡りクルーズや世界でも数少ない避寒クルーズに最適な場所。今までに宮古に寄港したクルーズ船からも好評であった。』など、宮古島の魅力も交えた現代クルーズ事情について講演して頂きました。